

解 答

【一】

問1 a 呼応 b 預〔け〕

問2 前者は単に事実を写し取ることで、後者は真実をつかみ取ること〔。〕

問3 臨場感 問4 エ 問5 A エ B イ 問6 ア

【二】

問1 a 綱 b うなが〔され〕

問2 「おじいさん」を心強い存在〔だと思うようになった。〕

問3 ① ウ ② エ 問4 ウ 問5 このときの 問6 いつのまに

問7 母さんを、身近な存在だと感じられない〔ようになった。〕

解 説

【一】

- 問2 「見たまま」を詠んだ場合、「冷水に四つの角の～」、つまり「『事実』を写し取っただけの短歌」になります。一方、「感じたまま」詠むと、「冷水に八つの角の～」、つまり「『真実』をつかみ取った短歌」になると、本文中に書かれています。これらの部分を、設問の指示（「見る」を前者、「感じる」を後者と言い換えて）に注意して、解答をまとめましょう。
- 問3 問2でも考えたように、「真実」をつかみ取ろうと努力した結果、「八つの角」と表現したのですね。そしてこのことが、結果的に「作品に臨場感をもたらすことになる」と、Bの短歌の直前に書かれています。
- 問4 コインロッカーから大海原を連想しているのは、この短歌の作者です。よってア「～往来する人々が、～思っているところ。」、ウ「～日常生活に疲れた人々が、～願っているところ。」は×。また、作者は海の音を聞いたいとあせっているわけではないので、イ「～大海原の音を早く聞きたい」も×となります。
- 問5 A：空欄の後に「～その空間にひとたび足を踏み入れたら二度とは戻って来られないような、そんな危険な魅力に胸が騒いだ」とあります。「思わず足を踏み入れる」というイメージに最も近いものを選びましょう。
B：問2・3とも関連しますが、山田富士郎や高野公彦や大西民子は「感じたまま」短歌を詠んだから、超能力者顔負けの表現を手に入れたのです。「感じたまま」のイメージに最も近いものを選びましょう。
- 問6 傍線部4と同じ段落に「～『遠き沙漠の砂』と表したことで、歌の場面からロマンと冒險の香りがフワーッと立ちのぼってくるではありませんか。」、さらに次の段落に「～作者のみならず読者の私たちまでも、はるかな世界へと連れて行ってくれます。」とあります。これらの内容に近い選択肢を選びます。イは、「～遙かなる世界に思いをはせる人々に～」の部分が×。世界に思いをはせていない読者にも、ロマンを感じさせるはずです。ウは、「犬」の姿を「見たまま」書いただけの説明ですから不適。エは、「自由の身になる喜び」という内容が本文にありませんので、×となります。

【二】

- 問2 傍線部1をふくむ段落に、「おじいさんという、母さん以外の身内の存在をとても心強く感じていた。」とあります。つまりおじいさんはぼくにとって「身内」で、かつ「心強い存在」なのです。
- 問3 ①「杞憂」の意味は、「あれこれ無用の心配をすること」です。
- 問4 「ぼくの気持ち」と「うらはら（＝反対）」に、主人公は母にあれこれと「矢継ぎ早に聞いてしまっ」たのです。「興奮をおさえられずにあれこれと話す様子」と対照的な気持ちを述べている選択肢を探すと、ウに「～妙に冷静な気持ち」とありますね。
- 問5 5ページ目の中央付近に、「このときの場面を、ぼくはとても鮮明に覚えている。～」とあります。「覚えている」という表現は、過去に起こった出来事に対して使うものです。
- 問6 主人公が違和感を感じているのは、母に対して、まるで「お客様」を相手にするかのような動作をしている点です。設問で指定された部分からそれに当てはまる動作を探すと、6ページ最初の行に、「いつのまにか、手を膝に置いて正座をしていた～」という部分が見つかります。
- 問7 問2や問6で確認したように、主人公はたったの十日間で、おじいさんを「身内で心強い存在」に、母を「まるでお客さんのような存在」に感じるようになったのです。「まるでお客さんのような存在」という比喩表現を言いかえて、「身近に感じられない」あるいは「自分とは遠い存在に感じられる」とすればよいでしょう。あとは、指定語句に注意して解答をまとめましょう。